

立ち直る力

学長 平 川 新

レジリエンスと歴史の解釈について

本日は「立ち直る力」というテーマを掲げています。

東日本大震災のあと、新聞や雑誌などで「レジリエンス」や「レジリエンシー」といった言葉を見かけることが多くなりました。resilienceとは、弾力性や快復力といった意味です。私が最初にこの言葉を学術用語として聞いたのは心理学者からでした。東日本大震災よりも4年ほど前の2007年頃のことでしたが、その心理学者は、「心の回復力」といった意味で使っておられました。彼は、さまざまな理由で痛んだ心をどうやって回復させるか、を研究テーマの一つとしていましたので、そうした表現をしていたのだと思います。

このレジリエンスという言葉を知ったときに私は、これは歴史を理解する視点としても有効なのではないかと考えました。私の専門は歴史学、そのなかでも江戸時代を対象としています。レジリエンスという視点から歴史を解釈するとはどういうことか、という点について、少し事例をあげて紹介しておきます。

稲作と飢饉

たとえば、東北地方は歴史的に長い間、凶作や飢饉にさいなまれてきたことが知られています。1780年代の天明の飢饉や1830年代の天保の飢饉などでは、数万人から数十万人が食料不足のために餓死したり、疫病で死んだといわれています。食料不足で体力が落ちていますので、飢えて死ぬだけではなく、疫病が流行しやすくなっているわけです。

したがって、どの程度の被害があったのか、あるいはどのような救済措置がとられたのか、といった視点から悲惨な実態が次々に明らかにされてきましたし、当時の政治の限界なども指摘されてきました。これらは大変重要な研究成果ですが、ここにレジリエンスの視点を入れるとどういうことがいえるようになるのでしょうか。飢饉の主因は稲作の不調つまり凶作にありますので、その稲作を手がかりに考えてみると次のようなことがいえるのではないかとことです。

凶作になるのは、稲の育つ夏に冷夏、つまり冷たい夏がやってきて、稲の生育に大きなダメージを与えるからです。平年の半分くらいになるとか、2割3割、場所によって皆無作、ほとんど全滅といったところもあったようです。

なぜこうしたことになるのかといえば、稲は本来、熱帯や温帯の作物だからです。ご承知のように、稲作が南方から伝わり、西日本からそれが広まって少しずつ北のほうにも伝播していきました。弥生時代というのは紀元前数百年あたりからのことですが、稲作が普及し始めたのを基準として弥生時代と称しています。

稲作の伝来はそれほど大きな意義をもっていたのですが、東北は現代でもしばしば冷夏があります。戦前までは、数十年ごとの大凶作や飢饉と、数年ごとの凶作を避けることができませんでした。先日の天気予報では、当たるかどうかはわかりませんが、今年も冷夏

になる可能性がある」と伝えておりました。いずれにしろ東北は本来、気候風土的には稲作には不適格な地域だといっておいた方がいいのであります。しかし現在、東北の米は日本でもっともおいしいと言われております。

なぜこの東北にこれほど稲作が普及したのでしょうか。そもそも稲作が全国に普及したのは、栽培がうまくいけば大量生産が可能だということと、保存性が高い、つまり長期の備蓄が可能だったからです。米がたくさんとれば社会の人口維持能力が高まりますので、人口が増えていきます。そうしたよい点は多々あるのですが、いったん冷夏に見舞われると凶作になって、一気に食料不足になります。そのため餓死者が出たり、体力が衰えて病気で亡くなる人が続出することになります。稲作を押し広めていくメリットは大きいのですが、リスクも大きいということです。

稲作の可能性

しかし一方で目を他に転じてみると、次のような現象も確認することができます。たとえば、江戸時代の東北地方には、「農書」つまり農業書のことですが、この農書が大変たくさん残されています。農書の内容は、同じ東北でも地域によって異なります。土地をどのくらいの深さまで耕すか、どのような肥料を、どの程度、いつ頃入れると一番よいか、こうしたことが地域の特性を把握しながら書かれています。山あいの村、海沿いの村、盆地の村。それぞれ気候も地質も違います。だからこそ、それぞれの地域にあった耕作法を、それぞれの地域の人たちが工夫して、それを農書という形で伝えていくわけです。また、寒さに強い稲の品種改良も続けられました。こうして、その地域に合った耕作法が独自に開発されていくことになります。そのような根気強い、血のにじむような工夫をもとに、それぞれの地域で多くの農書が生み出されてきました。

多くの困難があるにもかかわらず、東北の人々が他の作物よりも稲作にこだわったというのは、当時は米がもっとも商品価値が高かったからです。稲作不適格な地域で稲作をやりたいという気構えは、そうした商品価値の魅力と表裏の関係にあると思います。だからこそ、こうして繰り返し襲ってくる凶作や飢饉にひるむことなく、稲作の改良に地道に取り組んできた。それが、この東北という地域でした。そのような稲作の歴史と文化が、この東北の地域には濃密にあります。

仙台米の価値

ところで仙台米は、江戸に供給される米の3割とか4割を占めたといわれております。この数字自体は定かではありませんが、いずれにしろ仙台米なくして江戸住民の生活は成り立たないほどの比重を占めていたことは確かです。江戸には、どこの米がおいしいかということ相撲の番付に見立てて書いた米の番付表がありました。これをみますと、仙台米は横綱や大関ではなく、一番下の幕下あたりに書かれています。つまりあまりおいしくない米だったということです。従ってこれまで、仙台藩は一生懸命に米の増産に励んだけれども品質の悪い米しかできなかったというように評価されることが多かったように思います。

しかし私は、そうした評価や解釈だけでよいのだろうか、と考えております。味が落ちるのはなぜか。それは品質が悪いからではなく、冷害に強い米作りをしてきているからで

はないのかと思います。冷害にも強く味も上質な米、というのは、当時はまだ実現できていませんでした。味のよい米を作ろうとすると、冷害に弱い稲になります。それが凶作の原因になっていたのですから、冷害に強い米の品種にせざるを得ません。そうするとたくましい稲になるので、どうして大味な米になってしまいます。

あまり味がよくない米を作っているのは、凶作というリスクを避けるための方法であり、知恵だということができるのではないかと考えております。味よりも実りの確実さ。それが寒冷地での米作りに求められていたということです。

もう一つ注意しておきたいと思うのは、その味のあまりよくない仙台米が、ではなぜ江戸入荷米の多くを占めているのか、ということです。おいしくない米なら売れないだろうと考えるかもしれませんが、そうではなく、よく売れています。だからこそ、それだけ出荷しているわけです。

では、なぜ売れるのか。それは安いからです。江戸の庶民は安い米を求めています。味はそれほど良くないけれども、安いからよく売れる。仙台米というのは、江戸の庶民にとってなくてはならない米だったわけです。江戸の米の番付表で最下位だから、たいしたことはない、ではなく、最下位だからこそその価値がそこには現れています。生産と流通と消費の連環でみていくと、凶作や飢饉を克服するための様々な営みや社会のあり方が、悲惨さという視点とは別に見えてくるようになってまいります。

おいしい米の産地になった東北

こうして東北の人々は長いあいだ、冷害に強い稲を作ることに精力を費やしてきました。明治から戦前の東北には、まだまだ大凶作が襲っていました。しかし、それにもめげずに稲作を続けてきました。その結果、どうなったか。

第二次世界大戦後には次々にブランド米が開発され、ついに東北と越後はおいしい米の産地という名声を得るにいたりました。東北に稲作が伝来してから二千年です。凶作や飢饉に見舞われながらも、品種を改良し、農耕法を工夫しながら、一途に稲作に取り組み続けてきました。だからこそ、戦後の飛躍が生まれました。

こうした歴史の過程をみると私は、これこそレジリエンスつまり、回復する力だと思わざるを得ません。私はここに、それを支えた人々の姿を想い浮かべながら、凶作・飢饉に見舞われ続けた東北の悲惨さを乗り越える、地道だが力強い歴史の過程を見出しておきたいと思っております。

レジリエンスから見える希望

このたびの大震災、ことに巨大な津波は、途方もない大きな被害をこの地域にもたらしました。神はどこにいるのか、という問いを發した人たちも少なくありません。その問いについては、みずから回答を探し求めるしかありませんが、いま私たちが勇気づけられるのは、先人たちの歩んできたこのような歴史であります。

震災直後には絶望の淵にあった多くの方々も、少しずつ立ち直り、みずからが何をなすべきか、と氣力をふるい立たせている人たちを、たくさん見てまいりました。私はそこに希望を見いだしたいと思っております。

私がこのレジリエンス、「立ち直る力」にこだわるのは、このレジリエンスが単に災害

からの回復力となるだけでなく、未来を切り開くための力となるという点にあります。レジリエンスを支えているのは人々の気力であると共に、人と人とのつながり、絆、です。その絆は、痛めつけられた社会から回復する強い力を発揮すると共に、これからの新しい社会を築いていくための強い力ともなります。

改めて申し上げますと、このレジリエンスという視点をもてば、希望という要素が見えやすくなります。立ち直りや回復はまさに希望であるわけです。その希望を育むための共同や連携といった関係も見いだしやすくなります。どのようにして回復していくのかを見るときに、そこに広がる人間関係や社会的なネットワークに目を向けることになるからです。そうすると、共同していること、連携している姿が見えやすくなってきます。

被災者の方々に、こうした先人たちの立ち直りの歴史をお話しますと、多くの方々が希望が持てるようになったと喜んでくださいます。

私は歴史の現象をできるだけ前向きにとらえ、これからも「元気の出る歴史学」を、社会に提示できればと思っております。ただ現在の学長という職は、研究をしたり、ゆっくりと考えたりする時間がほとんどとれない職だということも、この一ヶ月で、よくわかりました。それにめげずに、私自身のレジリエントな力を蓄えて、なんとか学長職と研究が両立できるように、がんばっていきたいと考えております。